

熊本大地震被災地で 頑張っている女性たち

(本誌6月号カラーグラビア参照)

一般財団法人防災教育推進協会 常務理事

秦 好子

揺れ続ける熊本地震

4月14日(木)に発生した平成28年熊本地震は、地元熊本この眠りを覚ます大きな揺れと被害をもたらした。

相次ぐ地震の発生により、熊本県内を中心とする交通網等が大きな影響を受けた。熊本空港ではターミナルビルの天井が一部崩落する等したため、閉鎖され全便が欠航されていた。

空港の24時間運行が始まった直後の、4月25日早朝の飛行機で羽田空港を立ち熊本空港に降り立った。空港ビルのあちこちに張られた立入禁止を示すロープとその先のビル壁面の亀裂から、揺れのすさまじさを実感した。

1泊2日の駆け足のスケジュールで、避難所運営やその後の支援の調整のための視察を行った。

アレルギー食による アナフィラキシーショックが発生している

大規模避難所となっている益城総合体育館の指定管理者である熊本YMCAの担当者から横浜YMCAに送られた情報によると、避難者にアレルギー症状が出ていて、す



安部助教の研究室の被害



熊本空港1階ロビーの被害

に何人かにエピペン (epipen) を打っているとのことだった。この症状はアレルギーの原因物質に触れ、あるいは食べることで起こる急性のアレルギー反応で、アナフィラキシーショックと言われている。このアレルギーの症状は多様で、末梢血管が拡張することによる血圧の低下やショックによる心拍の低下、除脈になり意識レベルが低下し、体温が上昇する等とされている。

私が事務局長を務める「被災地の子どもを支援する神奈川県市民の会」や「横浜災害ボランティアバスの会」の会長は、横浜YMCA総主事の田口努氏で、氏は阪神・淡路大震災以降のボランティア活動の同志でもある。

田口会長から「熊本地震被災地支援はアレルギー食支援をできないか」との連絡を受けたのは4月15日で、「18日に横浜YMCAから職員2人を車で派遣するので、その際にアレルギー対応の支援物資を持たせることは可能か否か」との電話が入った。

被災地では、食アレルギーのある子どもがとても厳しい環境に置かれることは、東日本大震災での支援地、気仙沼の避難所での体験から理解していた。

気仙沼の避難所で若い母親に「子どもに食のアレルギーがありますが、対応した食べ物はありませんか」と問われ、対応できなかった経験がある。ご飯しか食べさせられ



益城総合体育館の避難所

ない、と言っていた。会長には「とりあえず準備します」と報告するとともに準備に入った。

4月15日の熊本市内は

4月14日深夜、熊本大学に勤務する安部美和助教に安否確認のメールを入れた。安部助教は北九州市消防局で救急救命士として勤務した後、京都大学大学院で学び博士号を取得した方で、スマトラ地震後のスリランカで復興支援や教育に関わった経験を持つ方である。

彼女からは4月15日00時20分に「かなり揺れました。研究室にいましたが、パソコンも棚もひっくり返りました。自宅はたいしたことはことなさそうです。市内より別の町がひどいらしいのですが、情報が入らない。まだ余震が続いています。余震もですが、ヘリ、道路や線路の軋み、マンションの警報等の音がすごいです」との返信があった。

4月16日のメールで支援先を確定する

4月16日午前8時00分、ボランティア仲間の小児科医から「熊本の地震に何か支援の計画は？」との照会メールがあった。アレルギー児支援についての要旨を伝える。被災地地元のアレルギー対応の小児科とつながり、支援内容に誤りのないようにしたいと思ったが、開業医には負担ではないかとのアドバイスと頂く。

夜8時には、安部助教から熊本大学が避難所となり500人を超える避難者が入り、付きっきり状態であるという旨のメールがあった。水と食糧が厳しかったが、明日は改善する見込みとの情報も添えられていた。私たちの支援先を、益城総合体育館と熊本大学の避難所ととりあえず決める。益城町のアレルギー児を扱う小児科医院をネットで見出し、地元ボランティアに確認するが、連絡がつかないと連絡が入る。

4月25日。益城総合体育館から町内の被害多発地域を視察中に、探している小児科医院を見つけ、食アレルギーのある子どもの支援について医院長と意見交換をした。医院長は開業していることを周知して欲しいこと、周辺家屋の倒壊による間接被害除去のためにボランティアの支援を求めている旨を語った。



カップ麺にお湯を注ぐ避難者。受け取りに来られない避難者もいる。

益城の住宅倒壊現場



全壊の木山神宮



アレルギー食をどうするか

アレルギー食について、高知県黒潮町役場の友永公生氏に、黒潮町の第三セクターである黒潮町缶詰製作所の製品の在庫状況を照会した。在庫は4千個ほどある旨の返信を頂き、18日に横浜から出発する横浜YMCAの支援車両に乗せられるか否かを検討し、とりあえず団体で対応可能な金額相当の提供を依頼し、様々な検討を重ねた結果、広島YMCAに送って頂きピックアップすることとした。とりあえず購入できる525缶の出荷を黒潮町の友永氏に依頼して、配達までの確認を取った。時間との闘いが始まる。

黒潮町の缶詰は7種類のアレルギーに対応し、かつ添加物を抑えた商品で、食べる人に着目して味付けが優しい。友永氏からは、私たちへの出荷について町長の許可が得られた旨と、缶詰工場の専務に数量を多く出すように依頼した旨の連絡を頂いた。私自身この缶詰をとっても便利に使っ



第1陣の支援物資を積み込む。



港北消防団員の大森団員が提供したトマト



大量に支援物資が集まったY M C Aから物資が届かない避難所へ配送するアロッソ熊本の加藤陽介トレーナー



熊本大学の安部美和助教(左)と熊本市消防団の永田恵子分団長



林文子横浜市長に支援活動の報告(右から2人が筆者)

ていることから、自信をもって支援物資とすることができた。アレルギーの子どもの食べられる物は…ほかにまだ何かないだろうか。

被災地では生鮮食料品が不足する。東日本大震災時に、私たちとともに気仙沼市に野菜を贈り続ける活動をした、横浜市港北消防団員で、新横浜近くのハウス農場でトマトを中心とする大規模農園を営む大森氏に電話を入れた。18日昼の出発に合わせて野菜を出して頂けるか否かを打診した。「少しなら出せる。どこに何時までに届ければ

よいのか」との問いに、市庁舎に隣接する横浜Y M C Aに届けるように時間指定をして了解を得る。出発当日、Y M C Aの車庫には大森氏が運んできたトマトが50キロ近くもあった。大森氏は、とても糖度が高く品質が均一化された高級品のトマトを作る青年営農家である。

横浜市役所への依頼

4月の人事異動で、横浜市役所も大きな異動が発令された後で、知人友人の多くは異動したばかりであった。在職中に私は横浜市の女性管理職の会「あゆみ会」の会長を務めていた。その時に副会長を務めていた友人が総務局理事から区長に転出していたので、彼女に支援活動の経過を話し、市長への経過報告、交通規制がなされた場合に備えた緊急車両としての通行証の発行のための調整を依頼した。16日中には横浜市政策局の理事から報道担当課長と所要の役職者に報告がなされ、出発当日の18日午前10時30分には田口会長から林文子横浜市長に報告がなされる手筈となった。

18日朝一番に、ここまでの間の経過を、私たちボランティア団体の副会長を務め、横浜市内の事業者からの支援を取りまとめくださっている地元企業、(株)ダイイチの鈴木会長をお訪ねしてご報告をし、横浜市長へのご報告に同行

して頂くよう依頼し、会長の車で市庁舎に向かった。

林市長からは「政令指定都市市長会の会長を務めていることから所要の支援対策を進めていくが、行政の支援では行き届かない細かな支援、特に今回のようなアレルギーのある子ども対策等にはぜひ市民団体にもご協力を頂きたい。細かな筋目を埋めるような活動をお願いしたい。できることは協力するので、申し出て欲しい」との心強い激励を頂いた。危機管理室に確認を頂き、現況では通行証は不要だが、途中で必要となった場合には市役所に連絡を入れれば、通行先の自治体に連絡し対応する旨のお話も頂いた。

被災地は真っ暗闇、ソーラーランタンの出番

益城総合体育館の避難所から「体育館通路を使って避難者の受入を行っているが、停電による暗闇は被災者を一層不安にしている」という連絡があった。熊本大学の安部助教からも「体育館は非常電源による灯りがあるが、道場等の避難所は暗闇であり、灯りが欲しい」という旨の情報があった。

東日本大震災後、東京消防庁OBが、津波被災者の救助活動等の困難さを克服するため、太陽光で発電し、小さなLEDを灯すソーラーランタンを開発して商品化していた。このソーラーランタンの機能評価に参加していた縁で、被災地支援への製品提供を求め、150個のソーラーランタンが被災地に向かうこととなった。電池が要らない、火災危険がない。軽量で安価な製品の有効性を試すには良い機会となった。消防職員が、後輩の緊急消防援助隊活動を見ながら、活動を容易にするための開発に関わることは素晴らしいことである。

熊本地震被災地支援車両は、熊本勤務経験のある職員を含むメンバーで、18日午後一番で横浜Y M C Aを出発した。Y M C Aの作業所で作っている米粉のパンやクッキー、大森氏が提供したトマトの箱、ソーラーランタン150個を積んだワゴン車は熊本に向けて出発した。



避難所となった熊本大学体育館

支援活動体制の構築

熊本が島国であることを実感させられたのは、飛行機が使えない、新幹線が使えない、高速道路に不通区間があることによってであった。

今まで、私たちの被災地支援活動は、メンバーが直接被災地に足を運び、所要のニーズ把握活動を行い、その内容に基づいて支援メニューを組み立てて、直接現地で活動を行うものであったが、今回は、益城総合体育館のほか、いくつかの指定管理者をしている熊本Y M C Aと連携し、熊本大学の安部助教のアドバイスを得ながら、被災地支援をする体制とした。この方法は、支援活動経費負担の軽減と効率化からも、遠方被災地では効果的であると考えられる。

それから、私たち支援団体に幸運が重なった。東日本大震災時に気仙沼支援活動に参加してくれたスポーツトレーナーの加藤陽介氏が熊本に在住していて、アロッソ熊本でトレーナーとして勤務している旨の連絡が入った。「できることは何でもします。言ってください」と心強いメールがきた。彼は、横浜市内の少年サッカークラブのコーチや高校のサッカーチームのコーチをしていたことから、被災地支援に参加する多くの青少年の中心として活動してきた青年で、そのリーダーシップと安全管理に関する気配りには稀有な能力を発揮した経歴を持つ。支援先を益城総合体育館、熊本大学、その他小規模避難所とし、支援物資集積拠点を熊本中央Y M C A、調整員を加藤陽介氏と横浜Y M

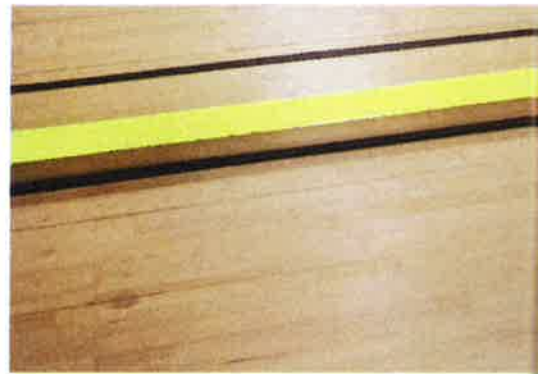


益城避難所の飲物配布場所を照らすソーラーランタン



Please walk slowly (ゆっくり歩きましょう)

事故防止のための蛍光テープ



柔らかな受け答えをされる。

国際化に対応した避難所の運営を視る

熊本大学体育館の避難所は、あらかじめ定められた避難所では無かったので、早期には市からの支援物資が届かなかった。避難者が最も多かった時は900人を超えていた。その三割ほどは外国人留学生で他は学生や近隣住民だったそうで、その運営の難しさは想像以上であったであろう。

避難所内の共通言語は日本語だが、様々な案内や掲示は日本語と英語で困らないように配慮していた。運営について、当初バイリンガルの日本人学生からボランティアを募り、その後は避難している外国人避難者にも呼びかけてボランティアを募り、協力を得ながら運営をしたと聞いた。

避難所内ゴミの分別方法や交通情報、コンビニや商店の案内等、説明は日本語や英語等で表示されている。

大学という場所柄、様々な専門性を持つ研究者や学生が避難所運営に参加している。体育館には心地よい音楽が流れている。昼食から夕食までの間ヒーリング効果のある音楽を流して、ストレス緩和対策に活かしているようだ。

避難所となった道場には小さな段差があり、照明のない夜間の事故防止のために蛍光テープが張られている。

女性の身体ケアや母子のためのスペース等、細やかな情報も二か国語で貼り出されて、母子避難者の利便性を高めていた。

物品管理をする部屋では、宗教上の食の制限に対応するために、管理の段階で分別をする等の配慮がなされていて、学生がその管理を所管している。自由に手に取って食べられるおやつ、いつでも自由に使えるケア用品等、ストレス緩和の対応にも細やかな配慮がなされている。

それから、避難者の健康管理にも配慮されている。

避難所スペースでは、体育関係の学生が決まった時間に体操指導を行い、保健系の学生が血圧測定を受け付け健康相談に応じる等、多様な支援活動が行われていると聞いた。それ等の活動を容易にしているのは、安部助教への信頼と提案を受け入れる彼女の度量と人間性によるものと視た。

避難所に入った外国人のもとにはそれぞれの国の大使館が迎えの車を出し、自国民を新たな避難先に案内をされたようだ。



付箋紙に記した生活情報を手作りのマップにリアルタイム掲示。今後の避難所運営にとっても参考となる画期的な取組。

マップを活かす

日本国内には今後、海外からの観光客が増える。オリンピックも開催される。留学生や従業者として日本に住む外国人が増えていく。

熊本大学での避難所運営から多くを学ぶことができた。運営しやすい避難所の管理ではなく、被災者の生活の場を守るとの意思が強く感じられる避難所運営を視た。

特にマップを使って様々な生活情報を出し続けることは、被災者の自立復興にむけた行動の範囲を拡大させ、自己判断・自己選択を容易にする情報ツールとして特に優れた取組で、多くの被災地の避難所支援に関わった体験の中でも初めて視た優れた取組であった。

さあ、子どもたちの出番

第2陣では、アレルギーのある子どもたちにとって、暑くなるに従って必要となる下着上下のセットづくりに取り掛かった。おむつの子たちから身長150センチほどの子どもたちに、男女別で300セットをパッキングした。

ガールスカウトの子どもたちはそれぞれ激励のメッセージを記したカードを持寄り品々に添えた。米粉のクッキーとともに、ロアツ熊本の加藤トレーナーのもとに送られ、



にぎわう「カフェ・よこはま」



神奈川県ガールスカウト連盟横浜支部の子供たちによる作業の様子(上)とメッセージカード(右)。



他の品々とともに避難所に届けられることとなっている。

新潟県中越地震以降、被災者支援を防災を学ぶ場として位置づけ、ガールスカウトやサッカー少年にそれへの参加を呼び掛けている。新潟県中越地震や岩手・宮城内陸地震の被災地支援に参加した子どもは今や大学生になって指導者となっている。もう欠かせない戦力である。

終わりに

被災された方々の苦難の日々はこれからも長く続いていく。

私たちの支援団体は阪神・淡路大震災時に、神戸市の消防職員からもたらされた「救助された人たちに温かな飲みもの一杯があれば、もっと助かる命は増えるのに…」との無念の一言から、全国の女性消防職員の有志が核となって始めた活動だ。「とりあえず温かな飲み物を召し上がれ」と、香り豊かなロースト仕立てのコーヒーやお茶をたっぷり準備して、被災者のニーズ把握の場としている。

伝統となっている「カフェ・よこはま」は益城総合体育館の片隅でも開店している。とても喜ばれていると報じられていて、追加の注文も来ている。2,500杯分のコーヒーを届けているが、ほんの少しでも被災者の癒しになって頂けたら嬉しい。

熊本地震被災地支援は、様々な立場で働く女たちの頑張りが見えた活動でもあった。支援は揺れが収まらない被災地で、今も継続している。

(元横浜市消防局職員)

CAから派遣される職員とした。

女性による熊本大学体育館の避難所運営

4月26日、私は熊本大学体育館避難所を訪ねた。体育館の中は、避難者が日中に片づけのために自宅に戻ったり外出していることから、閑散としていた。

体育館内では、Tシャツ姿の安部助教が仁王立ちで何やら指示を与えていた。彼女と会うのは、新潟県中越地震後に内閣府の事業で協力して頂いた時以来で、10年余の時間が経過していたが、消防職員であった時代と変わることなくパワフルに活動していた。消防で培われた体験、スマートラ地震被災地支援での体験、京都大学大学院で学んだ深い学識に裏付けられた知識を活かした活動は、被災者、学内関係者に支持され、副学長から避難所運営を一任されていた。彼女の傍らでは、女性消防団員が被災者を相手にこやかに対応していた。

消防団員の制服を着た女性は永田恵子さんで、熊本市の消防団員歴14年目、現在、分団長歴5年目であると自己紹介をされた。元市役所職員で、現職時代から消防団員として様々なイベントに参加し、また、消防操法大会に出場し、休日や夜間には心肺蘇生法の指導や、子どもたちを対象とした防災指導に関わってきたということである。現在は再任用職員として勤務しているが、避難所で勤務することが認められ、市役所と熊本大学避難所の連絡係を務めているようだ。「安部先生と消防最強コンビです」と微笑む。消防団員になった動機は、消防団員にならなければできない防災に関わりたいからだそうだ。いまだ男尊女卑の気風が残る熊本の消防団で分団長にまで上り詰めるには相応の実績を重ねてきたことと思うが、とてもにこやかに